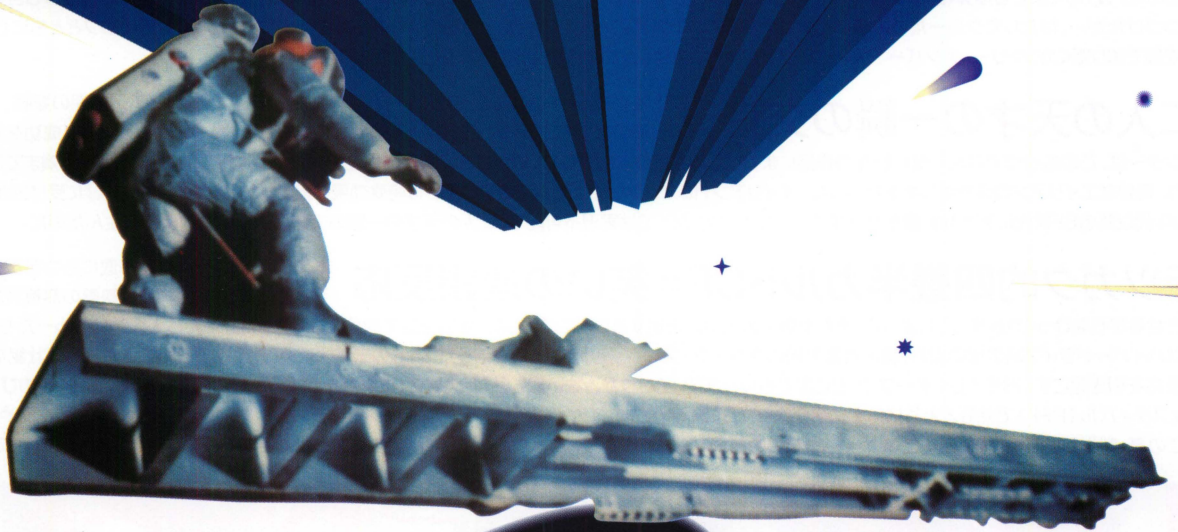


『2001年宇宙の旅』へのアンサー・フィルムにして、『スター・ウォーズ』に先駆けることはるか3年。

伝説の爆笑カルトSF、ついに発つ!

DAVE STAR



“ダーク・スター”

ジョン・カーベンター第1回監督作品 ダン・オバノン+ジョン・カーベンター脚本



“光あれ”と、20号爆弾は言った——

Let there be Light

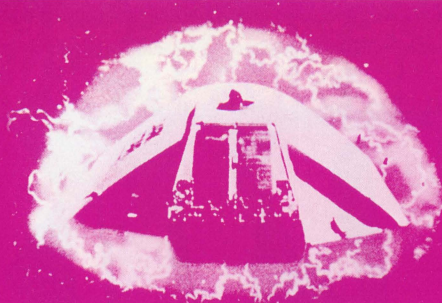
配給 ぴあ

DARKSTAR

“ダークスター”

製作・監督・脚本・音楽：ジョン・カーベンター

脚本・特殊効果・編集・出演：ダン・オバノン



撮影：ダグラス・ナップ

出演：ブライアン・ナレル

ドレ・バビッチ

カル・カニホルム

1974年 / 35mm / カラー / 83分

配給：

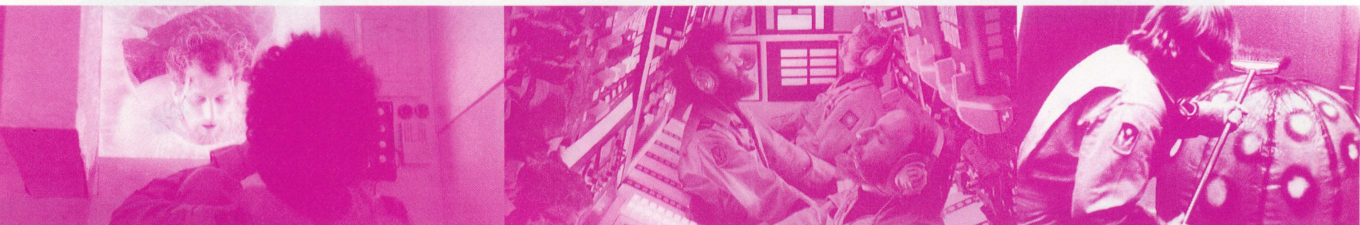
緊急連絡! 『ダーク・スター』待望(?)のロードショー初公開決定!!

何とか別のやり方もあろうってもんだ! 時は21世紀半ば、人類は宇宙の果てに新天地を求め光速探査船ダーク・スター号を送りだす。惑星除去以外にこれといって目的もなく、

退屈きわまりない宇宙船での日々を悩まされるクルーたち。ある時、流星群との衝突でコンピューター制御に異常が起き、惑星破壊用の第20号爆弾が意志を示し始める。彼(あくまでも爆弾ね)は自身の存在理由に悩みに悩んだあげく…、一方閉塞的な状況の中で、クルーたちは焦燥感に覆われながらも各々の夢を抱きつづけたが…、はたしてクルーたちの夢は実現されるのか。エンディング、「へい!何とか別のやり方もあろうってもんだ!」というセリフとともに(なぜか)宇宙空間で鳴り響くカントリー・ナンバー“ベンソン・アリゾナ”は涙なくしては聴けないのであった。

二人の天才の一瞬の交錯 あこのジョン・カーベンター(『エスケープ・フロム・L.A.』『ヴァンパイア/最期の聖戦』)の長篇第一作。その後『ハロウィン』『遊星からの物体X』などSF/ホラーのジャンルで成功を収めるカーベンターは、この処女作でなんと既に現在の作品にまで通じる獨創性を確立していた。U.S.C時代に机を並べたダン・オバノンも脚本から出演までこなす活躍ぶり。奇妙なエイリアンの発想は脚本を担当した『エイリアン』に、ハイパードライブ時の星の動きは特殊効果を担当した『スター・ウォーズ』に受け継がれており、80年代以降のSF映画に多大な影響を及ぼすことになる。今となっては実現不可能な、二人の天才の一瞬の交錯がこの奇蹟の傑作を生んだのだ。

テツガク的の四畳半カルトSF=笑いの連鎖反応 本作は哲学的テーマを基底にもつ苦悶に満ちたドラマなのだが、従来のSF映画の無機質さをイメージさせる定石をひっくり返すことによって、それを爆笑の渦中に表現することに成功した。宇宙空間で急停止する宇宙船、やたら人間臭いクルーたち、漫画のようなハイパードライブ時の星の流れ、機能性度外視のスペース・スーツ、追っかけっこを演じるベットのエイリアン(必見!)のお粗末さかげんが壮絶な笑いの連鎖反応を引き起こす。おそろしくチープで、どこまでもルーズで、そこはかない悲しみ(と大爆笑)に溢れたSF感動(←これホント)巨篇。81年のびあフィルムフェスティバル(PFF)で熱狂とともに日本に紹介されたSF映画の古典にして幻の傑作『ダーク・スター』。その後、長い年月を倉庫での思索に費やすが、ついこの夏、製作から四半世紀、PFF上映から約20年の時を経て蘇る。あの『スター・ウォーズ』に(勝手に)あわせて待望(?)のロードショー初公開決定!!



世紀末に日本で『ダーク・スター』を見ることの意味 | 中原昌也 音楽家 | 作家 | 映画評論家

後のハリウッドで、SF/ホラーのジャンルの中で甲乙付け難い成功を収める二人、ジョン・カーベンターとダン・オバノン。両者が協力し合い、この『ダーク・スター』という大傑作を生んだという事実が、余り知られていない、という程大げさではないが軽視されているというのが何だか悲しい。大物二人が処女作で共作! というお宝的な話題だけでなく、この作品にはもう一つの大きな奇跡が起っているからなのである。

南カリフォルニア大学映画科で意気投合したSFマニア二人が卒業制作で作った作品、にしてはオタクがキヤキヤ言ってるノリがまるで無く、恐ろしい位に諦念に満ちている。ここが最も重要なポイントだ。低予算ゆえのチープさ、手本になっているのが巨匠でありながら客をジーンと泣かせる映画を一本も撮らなかつた故キューブリックのクールな『2001年宇宙の旅』であることのせいかも知れない。いや、何よりも時代はその頃、アメリカン・ニュー・シネマとベトナム戦争の末期だったからというのが大きいだろう。しかし、こういう歴史的な観点で物を語るぐらい、格好悪くて知ったかぶりで詰まらないものはないと思うが、この作品に限っては仕方がない。見れば判るとおり、そんな映画なのだから。

その後、カーベンターもオバノンも娯楽に徹しつつもアーティスティックな部分も忘れずに第一線(?)で活躍しているが、この『ダーク・スター』のようなささくれた映画を撮っていない。聞くとところによれば、本作完成後に両者は最悪な仲違いをしたらしい。もう二十五年も経っているのだから、いいかげん仲直りすりゃいいと思うが、この二人が再び組んでもこの作品を超えることはないだろう。まあ、確かに今のカーベンターも別の次元で、ささかれていますと言えるが…。とにかく、この何も無い(終末すらない)世紀末の夏を、倦怠し切ったダーク・スター号の乗組員と過ごし、次の新しい世紀に新しいことの為の準備を始めようじゃないか、と思ってみる。

待望の劇場公開! 1月8日(土)よりレイトショー決定!!

● 夜9:05~(終映10:30) 1回上映 ※日曜休映

● 料金(当日券のみ): 一般1,600円/学生:1,400円/シニア1,000円

(1/21金)

“10th Anniversary”

梅田ロフトB1 06(6359)1080

テアトル梅田

<http://www.cinemabox.com/>